

龍田詞章

登場人物

前シテ・龍田明神の巫女
ワキ・旅僧

後シテ・龍田姫
ワキ連・從僧

ワ・ワ連 教の道も秋津国。教の道も秋津国。数有る法を納めん

ワキ これは六十余州に御経を納むる聖にて候。我此程は南都に候ひて。御経を納め申して候。又これより河内の国へと急ぎ候。

ワ・ワ連 古き名の奈良の都を立ち出て。奈良の都を立ち出て。有明残る雲間の西の大寺をよそに見て。はや暮れ過ぎし秋篠や。外山の紅葉名に残る。龍田の川に着きにけり。龍田の川に着きにけり。

ワキ 急ぎ候程に。これははや龍田川に着きて候。此の川を渡り龍田の明神へ参らばやと思ひ候。

シテ なうなう其の川な渡り給ひそ。

ワキ 不思議やなこの川な渡りそと呼ばはる方を見れば。向ひに女の候が申し候。

シテ 暫く休らい給へ申すべき事の候。

ワキ これは六十余州に御経を納むる聖にて候が。此の川を渡り龍田の明神へ参らんとと思ひ候所に。何とて此の川な渡りそとは承り候ぞ。

シテ さればこそ神に参り給ふは。神慮に遇はん為なり。心も無くて此の龍田川を渡り給はば。神慮もいかがありぬべきと。思へばかやうに申すなり。これは名におふ龍田川。心も無くて渡り給はば。神と人との中や絶えなん。よくよく案じて渡り給へ。

ワキ げに今思ひ出したり。龍田川紅葉乱れて流るめり。渡らば錦中谷絶えなんと。古歌の心を思へとや。

シテ なかなかのこと此の歌は。紅葉の水に散り浮きて。錦を張れる如くなれば。渡らば錦中や絶えなんとなりさりながら。尚々深き心有り。紅葉と申すも当社の神体。神の畏れも有るべければと。戒め給ふ心も有り。げにげにそれはさる事なれども今ははや。紅葉の頃も時過ぎて。川の面も薄氷にて。立つ波までも見えぬなり。許させ給へ渡りて行かん。

龍田川紅葉乱れて流るめり（古今集
読み人知らず
また奈良の帝の御歌とも）

ワキ いやいや尚も御科有り。渡らば中の絶えんこと。紅葉の錦に限るべからず。凍れる時も龍田川。渡らば氷の中絶えんとの。其の戒も有るものを。

ワキ 不思議や紅葉の錦ならで。氷にも亦中絶えんとの。謂はれは如何なる事やらん。

シテ 紅葉の歌は帝の御製。又其の後は家隆の歌に。龍田川紅葉を閉づる薄氷。渡らばそれも中や絶えなんと。かように重ねて詠みたれば。必ず紅葉に限るべからず。

家隆Ⅱ藤原家隆
（新古今集の撰者の一人）

同音 氷にも中絶ゆる名の龍田川。中絶ゆる名の龍田川。錦織りかく神無月の。冬川になるまでも。紅葉を閉づる薄氷を。情なや中絶えて。渡らん人は心なや。さなきだに危きは薄氷を履む理の。譬も今に知られたり。譬も今に知られたり。

龍田川紅葉を閉づる薄氷 渡らばそれも中や絶えなん

シテ 妾は龍田の明神の巫にて候程に。明神へ御参り候はば御道しるべ申し候べし。

ワキ さらば御供申さうずるにて候。

シテ

こなたへ御入候へ。なうなうこれこそ龍田の明神にて御入り候へ。

ワキ

さてはこれなるが龍田の明神にて御座候ひけるぞや。面白や頃は霜降月なれば。木々の梢も冬枯れて。気色寂しき社頭の御垣に。盛なる紅葉一本見えたり。これは御神木にて候か。

シテ

さん候当国三輪明神の御神木は杉なり。当社は紅葉にてわたらせ給ふ。紅色に愛で給ふによつて。紅葉を御神体とも崇め参らせ候。

ワキ

有難や我国々を廻り。今日は此の御社に参る事の有難さよ。和光同塵は結縁の始。八相成道は利物の終。

同音

下紅葉塵に交はる神慮。和光の影の色添へて我等を守り給へや。殊更に此度は。殊更に此度は。幣取り敢へぬ折なるに。心して吹け嵐。紅葉を幣の神慮。神寂び心も澄み渡る。龍田の峯はほのかにて。川音も猶互え増る夕暮れ。いざ宮廻始めんとて。名におう龍田山。同じ翳しの神葉を。とりどりに少女子が。裳裾をはへて袖を翳し。運ぶ歩みの数々に。度重なると見る程に。不思議やな今までは唯巫と見えつるが。我は真は此の神の。龍田姫は我なりと。名宣りも敢へず御身より光を放ちて。紅の袖を打被き。社壇の扉を押し開き。御殿に入らせ給ひけり。御殿に入らせ給ひけり。

ワキ

神の御前に通夜をして。神の御前に通夜をして。ありつる語を待たんとて。袖を片敷き臥しにけり。袖を片敷き臥しにけり。

シテ

神は非礼を受け給はず。水上清しや龍田の川。

同音

御殿頻りに鳴動して。宜禰が鼓も声々に。

シテ

有明の月。燈火の光。

同音

和光同塵おのづから。光も朱の玉垣かかやきて。あらたに御神体現れたり。

シテ

我神代より此方。此の秋津洲に地を占めて。君を守りの御銚を守護し。御代の光も天照るや。紅葉の色も八葉の刃。即ち銚の刃先なるべし。刃の験僧の法味に引かれて。夜半に実燈明らかなり。

同音

そもそも瀧祭の御神とは即ち当社の御事なり。昔天祖の詔。未明らかなる御国とかや。

シテ

然れば当国寶山に至り。

同音

天地治まる御代の恵。民安全に豊なるも。偏に当社の御故なり。

シテ

梢の秋の四方の色。

同音

千秋の御影目前たり。年毎にもみぢ葉流る龍田川。湊や秋の泊なる。山も動ぜず。海辺も波静かにて。楽しみのみの秋の色。名こそ龍田の山風も静なりけり。然れば代々の歌人も心を染めてもみぢ葉の。龍田の山の朝霞。春は紅葉にあらねども。ただ紅色に愛で給へば。今朝よりは龍田の桜色ぞ濃き。夕日や花の時雨なるらんと。詠みしも紅に心を染めし詠歌なり。

シテ

神南の三室の岸や崩るらん。

龍田の川の水は濁るとも。和光の影は明らけき真如の月は猶照るや。龍田川紅葉乱れし跡なれや。古は錦のみ今は氷の下紅葉。あら美しや色々の。紅葉襲の薄氷。渡らば紅葉も氷も。重ねて中絶ゆべしやいかで今は渡らん。

此度は幣とり敢へぬ
此度は幣も取り敢へぬ
手向山 紅葉の錦神の
まにまに(古今集 菅
原道真)
紅葉を幣の 龍田姫手
向くる神のあればこそ
秋の木の葉の幣と散
るらめ(古今集 兼覽
王)

年毎にもみぢ葉流る 龍
田川 湊や秋のとまり
なるらん(古今集 紀
貫之)

神南の三室の岸や 龍
田川 崩るらん(拾遺集
高向草
春)

シテ

さる程に夜神樂の。

同音

さる程に夜神樂の。時移り頃去りて。宜禰が鼓も数至りて月も霜も白
和幣。振り上げて声澄むや。

シテ

謹上

同音

再拜

シテ

久堅の月も落ち来る瀧祭。

ワキ

浪の龍田の。

シテ

神の御前に。

同音

神の御前に。散るはもみぢ葉。

シテ

即ち神の幣。

同音

龍田の山風の時雨降る音は。

シテ

颯々の鈴の声。

同音

立つや川波は。

シテ

それぞ白木綿。

同音

神風松風吹き乱れ吹き乱れもみぢ葉散り飛ぶ木綿附鳥の。禊も幣も翻
る小忌衣。謹上再拜再拜再拜と。山下草木国土治りて神は上がらせ給
ひけり。